

〔聞き書き〕 真光寺にて ― 東郷正文さんに聞く

丸山 徳次

はじめに

里山ORC研究班2の民俗文化班は、2007年8月24日（金）から26日（日）にかけて、大津市上田上（かみたなかみ）牧町にある真光寺にて、須藤護教授の指導のもとで民具の調査合宿を行いました。真光寺（浄土真宗仏光寺派）には、田上郷土史料館があります。

この合宿調査の最終日、すなわち8月26日、私は真光寺を訪ねました。そして、真光寺住職・東郷正文（とうごう・まさふみ）さんとお会いし、小一時間お話を聞くことができました。以下は、東郷さんからお聞きした話の一端を、私流に再構成したものです。私がメモと記憶にのみ頼って、聞き書き風に記したものを、東郷さん自身に見ていただきました。

一般に、薪・炭からプロパンガス・ガソリン・都市ガスへのエネルギー革命を通して、日本の里地里山の様子が大きく変貌したことは、しばしば指摘されているところです。田上盆地もその例外ではありません。戦後に起こったその変貌は、さまざまな生活道具の変化をもたらしました。あちこちの家から、伝統的な道具類が大型ゴミとして捨てられていきました。そのことに気づいた東郷さんたちは、それらを拾い集めることで、田上郷土史料館をつくったのだそうです。モノが捨てられ、忘れられていくという生活の変化は、また、言葉が失われていく、という変化でもあります。以下の文中にある「しゃぼう」とか、「ハゲシバリ」とかいった言葉は、そうした生活の変化を象徴する言葉に属するものでしょう。直接地元の方から話を聞くことによるのみ、その土地に生きていた言葉を知ることができます。

お話を聞かせて下さり、私の原稿に目を通して下さった東郷さんに、心から感謝します。

聞き書き

私は昭和12年（1937年）1月の生まれです。昭和34年（1959年）龍谷大学文学部国史学を卒業しました。龍谷大学がまだ単科大学の時代です。宮崎先生に教わりました。後に学長になられた武邑先生が、クラス担任でした。卒業後は、滋賀県下の各地で中学校の教師をしてきました。

大学に通っている頃、私は毎朝、自転車で瀬田山を越え、瀬田の唐橋を渡って、国鉄の石山駅から蒸気機関車に乗り、京都まで行きました。瀬田山の道は、今「龍谷の森」の東側を通っている道と同じ道ですが、今のように掘り下げられてはいなかったので、登りのきついものでした。それでも20分余りで石山まで行ったものです。「瀬田山」という言葉を使っていましたし、「瀬田山」の東隣は「草津山」と呼んでいました。瀬田山は石山の方に出る道のある場所として、牧の人々にとっては、草津山よりも重要な位置にありました。草津山の方は、越えても「野路」（のじ）に出るだけで、野路はまだ草津の町からも遠く、十分田舎だったのです。

真光寺はもと大戸川近くにあったのですが、村が大戸川の大洪水の被害を受けたあと、今から約230年前に、「恋ノ山」に移転してきました。真光寺の山号「圓徳山」というのは、すぐ裏の山の名前です。今は新名神〔第二名神〕の工事が進んでいます。〔2008年2月23日に開通。〕

一村一カ寺であって、牧村のすべての家が当寺の檀家です。123戸ありましたが、現在は118戸です。

真光寺から南東に見える小高い山、大戸川のむこうにあって、堂山の東側にあたりませんが、その山を「たかざき」（高崎）と呼んでいました。私の子どものころは上の方がまったくの禿げ山で、草も生えていません。中腹から下は主にアカマツ林であり、さらに下の方にはヒノキやスギの植林地がありました。その禿げ山に登っては岩を落とす「岩落とし」が、子どもの頃の最も面白い遊びでした。大きな岩を掘り出しては、突き落とします。ゴロゴロと一気に落ちていき、太い松の木をなぎ倒したりするのです。随分悪いことをしたものです。

また、山の上では、水晶がよく取れ、さらに吉祥寺川のあたりでは、トッパーズも取れました。絵本作家の関屋敏隆さんが何度も訪ねてきて、『水晶さがしにこいう』（童心社、1999年）という絵本を完成させました。子どもの本ではありますが、とても専門的です。

田上枝にある「田上鉱物博物館」は、中司昭さんが個人で運営しているものであり、近頃は電話で事前に連絡しないとなかなか見せてもらえません。

国による植林事業が盛んになって、村の人々は「しゃぼう」（砂防）と言っていました。その「しゃぼう」が村の人々にとってはとてもよい現金収入になる仕事でした。昭和40年代から50年代になると、田上の周辺はゴルフ場ばかりになりました。「しゃぼう」のおかげで芝生はりに老婦の技術が活かされ、信楽・竜王をはじめ大阪くんだりまでマイクロバスで送迎され、小遣いを得ていました。

禿げ山の植林には、よくヤシャブシが使用されましたが、土地の人たちは「ハゲシバリ」と呼んだものです。

私の知る限り、瀬田山は禿げ山ではありませんでした。今とほとんど変わらぬ木々のある山でした。

昭和の10年頃から、石山・瀬田の東側に働きに出る人が多くなりました。また、国鉄や地元の農協が就職先でした。私の町内では、専業農家はほとんどなく、勤めで得た給料が農機具の購入資金となってきました。

滋賀県の物産史には、田上米と守山のハリマダ米がブランド米として記載されていますが、両地方とも江戸以降、水害に苦しんだ地域でもあります。しかし、野洲川の流域は今も開発がすすみ、ハリマダ米のブランドが薄れていくのが残念です。せめて田上米を、と思います。今や集落営農の形をとり、オペレーター以外は時間給の当番制で、年数回出勤することになっています。田上米を守ってきた先人の思いが、今ひとつ盛り上がらないのが残念です。

今度、古市秀樹さんを紹介しましょう。古市さんは、アミカケという土地で、先祖伝来のやり方を踏襲し、山からの水を利用して棚田を維持しています。ホタルの再生なども加えながら、自然保護を前面に押し出した米作りを推進することで、特色を出そうとしているのです。私自身も、ホタルの再生にはずっと力を注いできました。

大鳥居の住民の移転が既にあったのですから話は単純ではありませんが、牧の人たちはみな大戸川のダム建設に関しては、大戸川が生かされるダムであるように願っています。私たちは、川床に石組みを配置することで、アユの再生の試みもやってみたいと思っています。子どもたちが地元のアユをとって食べるイベントを企画できたら、と考えています。